【論　文】

岡倉天心の国際感覚

――英文著作を貫く理念――

柴田　馨

序

岡倉天心が書いた『*The Book Of Tea*』[1]（『茶の本』）は、栄西によって茶が持ち込まれて以来天心に至る間に著されてきた様々な書物のなかにあって、特異な位置を占める。すなわち、茶道の精神性にのみ焦点を当てた点に於いて他に類を見ないものであり、そこにこの本の独自性が見られる。天心が日本美術界に与えた影響は言うまでもないが、茶道論においても茶道の様式形式に触れず精神的な観点から茶道の本質に迫ろうとしたその思想は、現在にまで読み継がれている。

『茶の本』が出版された一九〇六年は、日露戦争により軍事的な文明開化を果たした日本が西欧という巨大なものと対峙しつつ、初めて世界の一角を占めるようになった時代だといえる。そこで、この本は日本と日本人のアイデンティティを考えさせるのに、大きな役割を果たした。この時代は、新渡戸稲造の『武士道』[2]（一九〇〇）や内村鑑三『代表的日本人』[3]（一九〇八）といった、今も尚、精神的な日本文化を語る上で重要視される英文著作が刊行されている。その中でも『茶の本』は、日本を超えてアジア、東洋という大局的視野を持ったことにより異彩を放っている。廃仏毀釈が唱えられ、古来の伝統文化のみならず、培ってきた思想が根本から揺らぎつつある状況の中で、日本が持つべき東洋の理想に目を向けた作品である。

本論は、天心の思想の独自性がどのようなものかを、天心の生まれによる精神的背景を踏まえつつ、天心の英文著作に即して説明しようとするものである。

Ⅰ　天心の思考法

天心は固い漢文調の文章を書くことに長けていたが、『茶の本』全篇に散りばめられた叙情的な表現から、彼が詩人としての一面を持っていたことは疑いない。だからといって、天心が論理的な文章を書けなかったと考えることは、根拠のないことである。天心の思考観について、大岡信は著書『岡倉天心』の中で、次のように述べている。「日常生活の観察が、天心にあってはそのままある文化圏と別の文化圏の比較論に有機的に吸収されていくというごく自然な傾きをもっていた。（中略）恩師アーネスト・フェノロサから受け継いだ学風の、天心独自の発展というものであったかもしれない」[4]大岡は、具体的な個別の現象の中に体系的構想を有機的に結びつけ、普遍的意味を見出すというフェノロサ的方法が、天心の中で文化人類学における比較論の形をとったと述べており、天心のこの思考法が良く表れているものとして次の言を引用している。

> 今自分の少し感じたのは西洋の学者が学問上でも自国と云ふ観念を持つて居て研究致しますから、研究する方針が西洋から外国に向つて来たことを主とするやうであります。東洋からして西洋に及ぼした文化の点に於ては如何にも冷淡であると思はれます。是れまでそれを論じたことはないことはありませんが、誠に少ないのであります。此点は東洋の側から余程研究して往かなければならぬかと思ひます。例へばアラビヤ人がモハメットを得て、砂漠の中から奮起して欧羅巴を靡かして、遠く西班牙まで往つて立派

な遺蹟を遺してある。それ等の拵へた美術がアラビヤ人が突然に作りたるか何かと云ふと、其形式が支那の古アラビヤ美術が起らぬ前に見えるものが多くあらうと思ひます。煉瓦の式だの色々なものゝ中にアラビヤ式が這入て、支那の方に先きにあつて、西洋の方が似せてありはせぬか疑ひます。其他にも色々ございますが細かいことに渉り、且時間もありませぬから余計申しませんが、亜細亜の側から調べて往きましたならば亜細亜が欧羅巴に影響して居る点はたくさんあるだらうと思ひます。それは日本の研究者が将来任じて遺るべき所だらうと思はれます。[5]

これは、天心の中国調査旅行後に書かれたものである。ここには、確かに天心が自分で体験し観察したことから、意味を見出し推論する歴史考察的研究態度が窺える。そして、ただの推察にとどまらずに、事象を冷静に見極める論理的な思考態度が見える。たしかに『茶の本』には、観察や体験によって得られることだけではなく、精神的なものに焦点を当てた議論が数多く盛り込まれており、それがこの著作の多面性、独自性をなしているように思われる。では、論理的な文章を書く基盤を持っていた天心が、どのような意図で精神性を明確に打ち出した『茶の本』を書くに至ったのか、次項において天心の精神的背景を、その生まれから考えていく。

Ⅱ　天心の精神的背景

岡倉天心は、文久二年十二月二六日に横浜に生まれた。[6] これは、江戸時代末期の動乱の最中のことであり、成人した天心にとって江戸時代はごく近いものであった。天心の英文著作の一つ *"The Awakening Of Japan"*[7]（『日本の覚醒』）にも江戸時代に関して、かなり詳しい考察がなされており、そのことからも江戸時代に対する深い理解のほどがわかる。この動乱の時代が天心の思想形成に与えた影響を考えてみる。

天心の父である覚右衛門[8]は福井藩士であったが、藩命により横浜で生糸などの貿易商を営むようになる。これがうまくいき、天心は当時最も外国に開かれた貿易港で、西欧の文化に触れる幼少期を送ることとなる。特に英語は身近にあったようで、一八六九年天心七歳の折にはジェイムズ・バラの私塾で英語を本格的に学び始めたとされる。天心の英文著作を支える下書きはここから始まる。[9]

父、覚右衛門の英才教育のもと天心は漢文を幼少時から学んだ。日本の思想の変遷や禅宗儒教、道教に関する素養は、その中で培われた。事実、天心が幼少期に神奈川県にある長延寺に預けられていた際に、玄導住職により『大学』『中庸』『論語』『孟子』などの漢籍を学んだとされている。[10]

また、天心に影響を与えたものとして興味深いのは天心の乳母である「おつね」の存在である。天心の実母「この」は店の商売のためか天心と関わることが少なかったために、天心はおつねに懐いたようである。おつねの話は天心の幼少時代において欠かせぬものらしく、天心を語る文献にはいくつもエピソードが載せられている。天心にとっておつねの存在もさることながら、おつねが幼少の天心に語って聞かせた橋本左内[11]の言行というのも非常に興味深い。次の証言を読もう。

天心の父は越前福井の藩士であったし、母のこの女というのも、福井県三国の港の産だったから、父母とも福井の出だったわけであるが、天心が二歳のころ、岡倉の家では国もとの福井から乳母を雇った。その乳母のつね女というのが橋本左内の親戚の者で、左内が小塚原で処刑されたとき、獄門台からその首を取ってきて、ひそかに葬ったといわれるほど、左内に非常に傾倒していた女性であった。このつね女は、天心を左内のような大人物にしようと、天心を寝かしつけるときなどに、左内の思想、左内の偉大さというようなことを幼い天心の心に盛んに吹き込んだらしいのである。そのため、後年、天心は、ひょっとしたらおれは左内の隠し子じゃあるまいか、などとさえ思ったこともある、と語ったという。もっとも左内は天心の生まれる三年前に処刑されているので、これはむろん間違いだが、しかし天心の初期の人間形成のうえで、左内の影響というのは、かなりあったような気がする。横山大観が天心からの受け売りで、さかんに左内の話をした、という事実も、このことを裏書しているようである。[12]

幼少期に植えつけられたものは、人格形成に大きく関わると考えられる。おつねが天心に語って聞かせた橋本左内の悲劇的な英雄像が、天心に大きな影響を与えているであろうことは想像に難くない。幼少期に橋本左内の偉大さを聞かされながら育った少年には、左内を父とするかのような憧れがみてとれる。同じ福井藩士でありながら、自分の理想のために死んだ橋本左内と、算盤を手にして時流にのった父を見比べたとき、天心が何を思ったのかは想像の域を出ない。理由がどのようなものであれ、天心の橋本左内への思慕は彼の中で続いたようで、『日本の覚醒』において左内に言及している。

このクーデターのもっとも痛むべき結果は、日本が多くの注目すべき天才児を失ったことであった。斬首に処されたものの中には、木戸、伊藤両侯爵の先輩であり、教導者であった長州藩の吉田松陰、マッツィーニのような知性の持ち主であった政治家橋本左内がいたが、この越前の偉才を殺しただけでも徳川幕府は滅びて然るべしといわれたくらいであり、日本のガリバルディとよばれた薩摩の西郷は、井伊の放った走狗の牙から間一髪のところで逃れた。[13]

Ⅲ　橋本左内の思想

では、この幼少から脈々と続いている天心の中に憧れのように存在する橋本左内の思想とは、一体どのようなものだったのか。『啓発録』は橋本左内が、一五歳の折に書いたものであり、武士として基本的な心得を五つ挙げて、それぞれ見解を述べている。一つは武士のあり方である。

然る処、太平久しく打続き、士風柔弱侫眉に陥り、武門に生まれながら武道を忘却致し、位を望み、女色を好み、利に走り勢ひに付く事にのみにふけり候処より、右の人に負けぬ、恥辱のことは堪へぬと申す、雄雄しき丈夫の心くだけなまりて、腰にこそ両刀を帯すれ、太物包をかづきたる商人、樽を荷うたる樽ひろひより

もおとりて、纔に雷の声を聞き、犬の吠ゆるを聞きても郤歩する事とは成りにけり。[14]

『啓発録』は、忠孝また主君に対する義に溢れている。しかし、左内はもともと医者の息子で医業を継ぐこととなっていたため、この時、思うように主君に忠義を捧ぐ生き方は出来るはずもなかった。そのような失意と無念、しかし、それでも志を持ち生きるべき指標を書き綴ったものである。また、武士というものに対する憧れとその現状に対する批判の裡に、当時武士の商人に対する見方がどのようなものであったかを、垣間見ることができる。また、学問についても、左内は明確な思想を持っている。

勉と申すは、力を推し究め打続き推し遂げ候処の気味これ有る字にて、何分久しきを積み思ひを詰め申さず候はでは、万事功は見え申さず候。まして学問は物の理を説き、筋を明らかにする義に候へば、右の如く軽忽粗麤の致し方にて、真の道義は見え申さず、なかなか有用実着の学問にはなり申さぬなり。[15]

学問については、道理や筋道を解釈し明らかにするものであるから、習熟する必要があるとしている。ここで、学問のあり方が、道理や筋道の解釈だとはっきり定義されているのは興味深い。論理的な思考を培うための基盤になりうる文である。

さて、これらのどの程度を天心はおつねから聞き及び知っていたのか、あるいは左内の著作を天心自ら手に取ったのかという点については、未だ実証的研究が行き届いていない。ただし、橋本左内が掲げた高邁な思想は、幕末から明治にかけての基本的な理想理念であり、それに関して天心が十分な理解を持っていたことは疑いない。確かに天心が左内に言及したところは前述した『日本の覚醒』中の一文のみであるものの、将軍後継問題や、江戸末期当時の日本の海外事情に関しての知識などについては、左内の書簡を参考にしたように考え得るものがある。以下、左内の書簡の一節を挙げ、その後天心の著作を比較する。

当今の勢ひ、日本の事務、国内の御処置と、外蕃御待遇との二件に帰すべく存じ奉り候。外蕃御待遇に付きては、海外の事情第一に御推察これ有りたく候。方今の勢ひは、行々は五大州一図に同盟国に相成り、盟主相立て候ひて四方の干戈相休み申すべく相運び候はんと存じ奉り候。（中略）

然る処、亜国その外諸国は交はり置き候も苦しからず候へども、英・魯は両雄並び立たざる国故、甚だ以て扱ひかね申し候。その意は既に「ハレルス」口上にも歴然、その上近来争闘の迹にて明白に御座候。これに依り、後日英より魯を伐つ先手を頼み候か、また蝦夷・函館貸し呉れ候旨願ひ出づべく候。その時、断然英を断り候か、または従ひ候か、定策これ有るべき事。（中略）

その上魯西亜・亜墨利加より、諸芸術の師範役五十人ばかり借り受け、諸国に学術稽古相起し、物産の道を手広に始め、内地の乞食雲介の類に頭を立て、相応の賄遣し、山海の営致させ、往来は重に海路より致し候はば、蝦夷も忽ち開墾相成るべく、航海術も

直ちに熟すべく存じ奉り候。（中略）
畢竟日本国中を一家と見候上は、小嫌猜疑には拘るべからざるは、勿論に御座候。[16]

既に、このとき左内の頭の中には、日本がこれからの国際社会の一員として同盟を結ばなければならないこと、また、結ぶ相手によっては日露戦争または日英戦争が起こるであろう事が思い浮かんでいたようである。また、同盟を組むだけではなく、その後の諸外国と対等に渡り合うための国策についても、既に検討されていたことが窺い知れる。日露戦争の約五十年前に、既に日本はこれだけの対策を取ることもできたのである。それは、果たされることは無かったが、決して日本が無知なまま諸外国の訪れを待っていたわけではないことがわかる。左内の示した国際感覚に対応するものを、天心の著作に見出すことができる。『日本の覚醒』に次のようなくだりがある。

外国人の間では、魔法の杖の一触で突如として何世紀もの睡りから我々を目覚めさせたのは西洋であるというのが、一般の印象である。しかしわれわれの目覚めの原因は、内部から来ている。我々の国民意識は、一八五三年ペリー使節団がわが沿岸に到着したとき、すでに動き始めており、国民覚醒に向かう普遍的運動を開始せんと、その出来事を待っていたにすぎない。[17]

日本には、一八五三年のアメリカ武装使節団は、すでに他のアジア諸国にはその出現があんなにも運命的だった白禍の、恐ろしい夢に思われた。その出来事の十一年前には、中国の阿片戦争が西欧の侵略の無道ぶりをさらけ出していた。ヨーロッパのアジア蚕食を絶えず日本に告げ口していたオランダは、その他のヨーロッパ諸国の行動を暗黒色に彩ることによって、自分たちの交友関係を強調するのに躊躇しなかった。事実、不幸なことに北からのロシア進出によって、我々は外国の強欲さということは、すでに多少経験していたのである。[18]

アメリカ使節団がはじめてやってきたときの将軍は十二代目で、若く病弱であったが、しかし彼には安倍伊勢守という有能な主席老中がついており、彼の状勢洞察力は素晴らしく、日本が現在あるのはそのおかげであるような開明的政策を始めたのである。彼のやったことのリアルな意味は、さまざまな相矛盾する批評と、没落王朝の政治家につきものの汚名とにまみれ、全く埋没しているといえる。彼が多数の反対勢力を押しきって行なったペリー提督との友好条約締結の交渉さえ、彼を誹謗するものから過小評価されているが、しかし我々をして始めて世界の爾余の国々と接触せしめたのはこの条約にほかならなかった。[19]

左内のみならず幕末藩士たちが掲げた理想を知っていた天心が、左内たちが予知していたように日清戦争もしくは日英同盟が結ばれたとき、何を思ったのかということは、非常に興味深い。最初の英文著作である『東洋の理想』を書き始めたのは、インドに渡る前の一九〇〇年頃とされている。天心は、このようにして培われた目で以って時代の流れを見ていたはずである。次に、これを背景として英文著作を書き始めた動機について考える。

Ⅳ　英文著作

岡倉天心は『茶の本』を書く前に、いくつかの英文作品を書いている。それは *The Ideals of The East with Special Reference to The Art of Japan*[20]（『東洋の理想』）であり、*The Awakening of The East*[21]（『東洋の覚醒』）であり、前述した『日本の覚醒』である。

これらの著作は『茶の本』とはやや異なった趣を見せている。まず、最初に出版された『東洋の理想』は、“Asia is one”という冒頭句で有名である。[22] この本の内容はインド・中国・日本に共通する東洋的な思想を中心とするもので、この冒頭句が、戦争をあおり朝鮮・アジアへ出兵を促すような意図でないことは明白である。確かに、西欧に対して立ち向かうべきとの言動は見られるが、戦争を鼓舞するようなものではない。天心が、他国を侵略するような簒奪を好ましく思わなかったことは、天心の著書自体において明らかである。このことは、その冒頭部分において現に明らかである。

> アジアは一つである。二つの強力な文明、孔子の共同主義を持つ中国人と、ヴェーダの個人主義をもつインド人とを、ヒマラヤ山脈がわけ隔てているというのも、両者それぞれの特色を強調しようがためにすぎない。雪を頂く障壁といえども、すべてのアジア民族にとっての共通の思想遺産ともいうべき窮極的なもの、普遍的なものに対する広やかな愛情を、一瞬たりとも妨げることは出来ない。こうした愛情こそ、アジア民族をして世界の偉大な宗教の一切を生み出さしめたものであり、地中海、またバルト海の海洋的民族とが、ひたすら個別的なものに執着して、人生の目的ならぬ手段の探求にいそしむのとは、はっきり異なっている。[23]

ここで天心は、アジア民族は国々の特色や違いはあるものの、その根底にある思想を共有することにより一つであると述べたうえで、西洋に対しての日本というよりも、西洋に対しての東洋といった視点で話を進めている。天心は国粋主義者、もしくは天皇絶対主義者と見られることがあるようだが、そのような理解は妥当なものではない。他国の文化や思想そして多様な宗教を認め、それに敬意を払う彼の姿勢に、極右的なところはない。確かに、その著作には愛国心が溢れている。しかし、これらの著作意図が、自国の国粋主義に基づく西洋批判ではないことが、次の一文でもわかる。

> 産業的征服は恐ろしく、道義的屈辱は耐えがたい。われわれの先祖の理想、われわれの家族制度、われわれの倫理、われわれの宗教は、日増しに衰退していく。後継の各世代は西洋人との接触によって道義的耐久力を失っていく。身だしなみが純粋さにとってかわり、賢さが男らしさにとってかわる。われわれは、わが意に反して、われわれに残されたあらゆるものの全面的な破壊に手を貸している。われわれは、分解をもたらす改革を企てている。われわれは、社会に実験をこころみて、破滅の道をいそがせている。われわれが自身の没落にあらがう意図の下におこなう西洋の知識の探求は、われわれの精神を、外国の誤った観点からものを見るように訓練する。われわれは絶望の瞬間に、高潔は便宜よりも偉

大であることをしばしば忘れる。奇妙な仮説がわれわれのもっともすぐれた知識人を支配している。詭弁は、強壮な者がどんな理由であれ借りることを憎むところのものを、弱者に多く貸しあたえる。或る者が屈辱は抵抗の真の手段であると主張すれば、大勢が熟慮して行動を放棄しなければならないと説く。そして全員が口をそろえて、復興のときは熟していないと言うのだ。[24]

天心は西洋の産業中心の物質文明に対し、東洋の倫理と宗教の文明を対置する。それは価値観、哲学であり国粋主義的主張ではない。西洋の物質文明あるいは個人主義に対する批判は『東洋の理想』だけでなく、『茶の本』まで続く英文著作において一貫するテーマである。

この惨劇は確かに悲しむべきであるが、国内には有効な影響を及ぼし、目覚めた日本が、専制主義の強化に対してはいかなることをやっても抵抗する決意であることを示した。恐らくこうした行動を正当化するのは、暗殺が武装しないパトリオティズムの唯一の武器であるという事実によるものである。[25]

ここで述べている専制政治とは、もちろん徳川幕府による治世のことである。しかし、当時植民地を広げていた西洋が新たな支配層となり、東洋を劣った蛮族の集まりとして専制政治を日本にひこうとすることへの牽制とも読み取ることができるだろう。いわゆる、黄禍論(Yellow Peril)に対する白禍論(White Disaster)[26]である。

ここで、日本の文化的源流に関する天心の思想と立場を考えてみなければならない。天心が九鬼隆一[27]や濱尾新[28]とその設立に腐心した東京美術学校の基本方針は、伝統的な日本美術の復興であった。それは、明治初年以来の文明開化主義への反動の一つの表れとして考えられている。美術界におけるこの伝統回帰は、維新以来の欧化主義への反省を促すものであった。西洋先進諸国に倣ってひたすら西洋文明の受容に努めてきたこれまでの日本の開化主義のあり方に対して、改めて日本の民族としてのアイデンティティを問い直し、日本の歴史と文化と独自の国民性とを取り戻し見つめ直そうというものである。当時、このような風潮が広がったのは、やはり維新以降、西洋に帰順し続けていたことに対する反動であろう。ただし、天心は西洋を批判する以上に、その物質的文明を唯々諾々と受け入れる盲目的な態度に対する批判に力点を置いている。

ヨーロッパの模倣と崇拝は、ついにわれわれの自然な制度となってしまった。ロンドンの最新の流行を見せびらかすカルカッタや東京のハイカラな青年紳士たちは、滑稽を通りこして悲しくなるが、これこそ現に瀰漫している思想のあらわれに他ならないのである。[29]

これまでの天心の言を見ると、英文著作である『東洋の理想』『東洋の覚醒』において、西洋の物質文明に対して辛辣なまでの批判を加えるとともに、美術品に見られる特徴を参照しつつ東洋は精神的なものにおいて一つのまとまりとして存在することが出来ると主張しようとしている。そして、『日本の覚醒』においては、この目覚めが西洋

によって与えられたものではなく、日本の思想の根底にある独立不羈の精神によって達成されたものだという考えを示している。

日本から追い出されたように海外に向かわざるを得なかった天心に、激烈な文章をもって西洋に東洋を理解させようと駆り立てたものは一体何だったのかと考えた時、思い当たるのは天心が有していたであろう日本の理想である。当時の目まぐるしい時世の流れの中で、日本が衰退していくのを遠い異国の地で見ていることに耐えられなかったのではないだろうか。

これこそが、天心に『茶の本』以前の英文著作を書かせた原動力だろう。天心には左内から受け継いだ使命感と、世界の一部である日本という大局的な認識があった。執筆の直接的な動機には、日本で職を追われ、大陸に渡り東洋美術を実際の体験として感受したということがあるだろう。ただし、西洋だけでなく東洋を包括する国際的で大局的な視野が、英文著作を書きうる要素として存在していたと考えられる。

V 『茶の本』の独自性

『茶の本』で語られている理想的な文明のあり方は一体どのようなものか。当時、強大な西欧に対して日本のアイデンティティを確立しようとするかのように、様々な思想家もしくは文学者たちが、強大な西欧に対する精神的な抵抗を試みていた。彼らは確かに西欧文化の第一の受信者であった。しかし、西欧に向かっての啓蒙を促したところに、彼らと天心との違いがある。そこで、天心と同様に英文著作によって、海外に啓蒙を促した人物について比較しつつ考えることで、天心が『茶の本』で語るものが何かを明確にすることができよう。

まず、内村鑑三の『代表的日本人』は、天心の英文著作集と同年代に英文で書かれたものである。内容としては日本の偉人たちを取り上げ、日本の文化への啓蒙を促すといった様に読み取れる。内村はキリスト教信者だったが、愛国心を持っていたことは著書を読めば明らかであり、西欧に対する啓蒙を英文による著作で促したという点において、天心に共通しているといえる。では、岡倉天心と内村鑑三は全く同じ意図で英文著作を行ったかということに関して、少々考察をしてみたいと思う。

> 青年時に抱いていた、我が国に対する愛着はまったくさめているものの、わが国民の持つ多くの美点に、私は目を閉ざしていることはできません。日本が、今もなお「わが祈り、わが望み、わが力を惜しみなく」注ぐ、唯一の国土であることは変わりありません。わが国民の持つ長所――私どもにありがちな無批判や忠誠心や血なまぐさい愛国心とは別のもの――を外に知らせる一助となることが、おそらく外国語による私の最後の書物となる本書の目的であります。[30]

外に知らせる一助ということからも、この著書が諸外国に対する啓蒙書の形を取っていることは間違いない。ただし、愛着はさめているもののという表現、また、私どもにありがちな血なまぐさい愛国心という表現から察するところ、内村は日清戦争における勝利に酔う日本に幻滅していることがわかる。

戦争は戦争を作ります。日清戦争は日露戦争を生みました。日露戦争はまた何んな戦争を生むかわかりません。（中略）日清戦争はその名は東洋平和のためでありました。しかるにこの戦争はさらに大なる日露戦争を生みました。日露戦争もまたその名は東洋平和のためでありました。しかし、これまたさらに大なる東洋平和のための戦争を生むのであろうと思います。戦争は飽き足らざる野獣であります。彼は人間の血を飲めば飲むほど、さらに多く飲まんと欲するものであります。そうして国家はかかる野獣を養うて、年に月にその生き血を飲まれつつあるのであります。[31]

この文章は『日露戦争より余が受けし利益』の一部である。内村は、日清戦争が起った当時は義戦だとして支持していたが、その内情を知ることによって戦争廃止論者となる。戦争に関して鋭い批判をする内村だが、そこに西洋が行ってきたことに対する批判の目は無い。また、『余の従事しつつある社会改良事業』でも述べているように、明治政府の国政、日本の社会に強い失望を抱いているが、当時様々な国が行なった同様の政治的行為について触れていない。これを、天心が日清戦争について述べている文と比較してみたい。

一八九四年～九五年の中国との戦は、中国が朝鮮の事実上の支配者たらんとする野望によっておこされたが、その主張は朝鮮が属国であるというものだった。（中略）一八九五年に平和条約が結ばれたが、その条件は中国が朝鮮の独立を全面的に認め、戦争の終わる頃、我々が占領した領土とともに、台湾を割譲することであった。（中略）我らは母国のためのみに戦ったのではなく、最近の王政復古理想のために、貴重な古代文化の遺産のために、そして全アジアの輝かしい更正を見る平和と調和の夢のために戦ったのである。[32]

たしかに天心は、義戦という立場を崩していない。しかし、以下の文章が続くことを見逃してはならない。

誰が黄禍を口にするか？中国が日本の援助でその大軍をヨーロッパに送るなどとは、黄禍を口にすることによって注意を他に外らそうという事情がなかったならば、あまりに馬鹿馬鹿しくて注意するにも値しないであろう。「黄禍」という言葉は、ドイツが山東の沿岸地帯を併有せんとしていた時、ドイツで始めて作られたものだということを知る人は一般には少ないと思う。[33]

ここに内村と天心の物の見方としての違いが潜んでいるように思われる。内村は日本に対する潔癖なまでの理想を持っていた。そして、それが壊れたときに一転し、失望または憎しみに変化したかのようである。一方天心は、西洋を批判する姿勢を崩すことなく、一貫した主張を続けている。ただし、両者ともに日本に対する失意を抱いていたこと、高邁な理想があったこと、そして西欧に対しての啓蒙書を記したという点において多分に共通しているが、著述の根底にある視点は明らかに異なるものである。以下、内村の『地人論』から引用する。[34]

日本国の天職いかに。地理学は答えて曰く、彼女は東西西洋間の媒介者なりと。言うなかれ、なんぞ簡単のはなはだしきやと。これ一大国民たるに恥ずべからざる天職なればなり。（中略）地理学の指定にかかるわが国の天職は、大和民族二千年間の歴史が不覚の中に徐々として尽くしつつありし天職ならずや。[35]

このように、内村は『地人論』において、世界のあらゆる国々が持つ美徳が同様に日本に備わっていること、そのため日本は西欧との媒介者の役割を務めうることを述べている。天心と内村は、世界に対して日本の美徳を知らしめようとする志を共有していた。そしてまた、両者ともに感じた無念、失望が皮肉にも西欧に対する啓蒙という行為に辿りついたことも興味深い。それにも拘らずその視点は、全く違うものであることがわかるのではないだろうか。

天心は西欧に対して啓蒙を促したが、それは内村のように「日本」という国の優位性を信じたためではなく、あくまでも西欧に対しての冷静な判断によるものだと考えられる。それは、英文著作を通し、また日露戦争後に書かれた『茶の本』においても変わらず西欧を批判する態度からも、汲み取れるだろう。そしてまた、天心には日本の優越という観念はなく、いつでもアジアの一部としての日本という視点を彼は保っていた。漢籍や美術に関する研鑽を通して、日本がアジアの中の一部であるということを、深く実感していたためである。

愛国心という立場から、海外に対して啓蒙を促した人物に新渡戸稲造がいる。次は新渡戸の愛国心について述べた文の一部である。

自分の政府の為したことは、何事にもあれこれであるが如く認め、これに賛同しこれを助けることが果して真の愛国心であろうか。理非曲直の標準は一国に止まるものでなく、人類一般に共通するものである以上、寧ろ是は是、非は非と明に判断し、国が南であれ北であれ、はたまた東であれ西であれ、正義人道に適うことを重んずるのが真の愛国心であって、他国の領土を掠め取り、他人を讒謗して自分のみが優等なるものとするは憂国でもなければ愛国でもないと僕は信じている。[36]

新渡戸は美徳に限らず、太平洋の橋となり日本を知らしめようと、国際連盟の事務局次長を務めた。前述した文は、一九二五年『実業之日本』に掲載されたもので、新渡戸の晩年の思想になる。日清日露戦争はもとより、第一次世界大戦も起った後、軍部が拡大している日本への警鐘だろう。ただし、ここでは海外への啓蒙という点を比較するため英文で書かれた『武士道』を中心に比較を行なう。天心が『茶の本』に於いて日本人の精神性の根本とした茶について、新渡戸も同様に『武士道』で述べている。

最も簡単なる事でも、一の芸術となり、しかして精神修養となりうるかの一例として、私は茶の湯を挙げよう。芸術としての喫茶！なんの笑うべきことがあろうか？砂に描く小児、若しくは岩に彫む未開人の中に、ラファエルやミケランジェロの芽があったのである。いわんやヒンズーの隠者の瞑想に伴いて始まりし茶の飲用が、宗教および道徳の侍女にまで発達する資格を有することは、

遥かに大ではないか。茶の湯の要義たる心の平静、感情の明澄、挙止の物静かさは、疑いもなく正しき思索と正しき感情の第一要件である。騒がしき群衆の姿ならびに音響より遮断せられたる小さき室の周到なる清らかさそれ自体が、人の思いを誘って俗世を脱せしめる。清楚なる室内には西洋の客間にある無数の絵画骨董品のごとくに人の注意を眩惑するものなく、「掛物」は色彩の美よりもむしろ構図の優雅さに吾人の注意を惹く。趣味の至高の洗練が求められたる目的であり、これに反し些かの虚飾も宗教的恐怖をもって追放せられる。戦争と戦争の噂の絶えざる時代において一人の瞑想的隠遁者（千利休）によって工夫せられたという事実そのものが、この作法の遊戯以上のものたるを示すに十分である。茶の湯に列なる人々は、茶室の静寂堺に入るに先立ち、彼らの刀と共に戦場の兇暴、政治の顧慮を置き去って、室内に平和と友情とを見出したのである。[37]

天心の『茶の本』にこれと全く同じ趣旨の文章があるので比較する。

茶道は、日常生活のむさくるしい諸事実の中にある美を崇拝することを根底とする儀式である。それは純粋と調和を、人が互いに思い遣りを抱くことの不思議さを、社会秩序のロマンティシズムを、諄々と心に刻みつける。それは本質的に不完全なものの崇拝であり、われわれが知っている人生というこの不可能なものの中に、何か可能なものをなし遂げようとする繊細な企てである。茶の哲学は、世間で普通に言われている、単なる審美主義ではない。それは倫理と宗教に結びついて、人間と自然に関するわれわれの全見解を表現しているからである。それは衛生学である、清潔を強く説くから。それは経済学である、複雑奢侈よりはむしろ単純さの中に慰安を示すから。それは精神の幾何学である、宇宙に対するわれわれの比例感覚を定義するが故に。それは茶道のあらゆる信奉者を趣味の貴族にすることによって、東洋民主主義の真精神を表している。[38]

両者が述べている物質性と精神性を、西洋と東洋として対比させた意図は明らかである。それは、諸外国に対する牽制、日本という国の文化が優れていると示すことで、蛮族と見做され属国あるいは植民地に成り下がることを危惧したために書いた啓蒙書という点である。『武士道』が出版された一九〇〇年は日清戦争のあとだが、このあと一九〇一年に日英同盟が結ばれ、日本が国際化の道を進んだ事からもわかるように、諸外国には熱狂的に受け入れられたようである。ただし、天心は『茶の本』の中で、『武士道』に関するやや否定的と見られる記述も残している。

近ごろ、「サムライの掟」――わが兵士が勇躍して身命を捨てる「死の術」についての論評を多く聞くけれども、茶道についてはほとんど注意が惹かれていない。茶道こそ、わが「生の術」を大いにあらわしているのである。[39]

この「サムライの掟」は新渡戸稲造の『武士道』のことと思ってよ

いだろう。「死の術」としか読み取られない『武士道』に対して、茶を「生の術」として強調する理由が次の文に表れている。

もしもわが国が文明国となるために、身の毛もよだつ戦争の栄光に拠らなければならないとしたら、われわれは喜んで野蛮人でいよう。われわれの技芸と理想にふさわしい尊敬が払われる時まで喜んで待とう。[40]

天心が『茶の本』を書いた当時、日露戦争が終わり、その勝利は西欧諸国に大きな衝撃をもたらした。ロシアは自らも西洋としての一面を持ちながら、長い間イギリスフランスに代表する西洋と戦いながらその歴史を刻んでいた。ロシアは長年にわたる大国であり、その国が極東の小さな国に敗北するということが当時西欧諸国にどれだけの衝撃を与えたかということは想像に難くない。

『茶の本』には、日本が西洋と同じく殺戮を意味する戦争によって先進国の仲間入りしたことについての疑念や懸念が読み取れる。

天心は西洋をよく理解していた。そして、西洋が東洋および日本というものをどのように考えているかを彼は知っていた。そして、ロシアという西洋に対して戦争という物質文明的な行為によって勝利したことで、日本が物質文明化のもたらす安易な楽しみによって、精神的な尊さが堕落していくことへの危惧がそこに読み取れる。これらの言は、天心がいかに世界の中の日本という立場を明晰に理解していたか、ということの証明である。

つまり、内村鑑三・新渡戸稲造の著作と『茶の本』が異なるのは、世界認識である。天心のそれを支えたのは、アジア全体に共通する文化の根底に流れている精神性についての深い洞察である。二人とは異なり、天心は日本をアジアにおいて孤立させない視野の広さを持っていた。そのことによって、天心は自由に大きな世界としてのまとまりを著作の中に示すことが出来たのである。

最後にもう一点、天心が内村、新渡戸と決定的に違う点がある、それこそが『茶の本』の最も根本的な著作意図であろう。茶の中に彼は西洋と東洋に共通して存在するものを認めていた。

まことに不思議なことに、かくも相隔たった東西の人情は茶碗の中で出会っている。東西を問わず重んぜられているのは茶道というアジアの儀式だけなのである。白人は、われわれの宗教と道徳を嘲笑してきたが、この褐色の飲料はためらいなく受け入れたのである。午後の茶は今日、西洋の社会で重要な役割を帯びている。盆や茶托の触れ合う微妙な音に、手厚くもてなす婦人の柔らかい衣ずれの音に、クリームや砂糖を勧めたり断ったりするありきたりの問答に、「茶の崇拝」が疑問の余地なく確立されていることがわかる。茶の味がよかろうと悪かろうと、客は運命に対する諦観をもって従容として待つ。[41]

この一文は、天心の思想全体の中で非常に興味深い位置を占める。今までの著作において天心は、西洋に対する東洋という両者の比較論を進めていた。しかし、ここでは東洋と西洋の対立について語るのではなく、「茶」において交わりあう二つの文化という論に変化している。

「茶」がインドや中国を経て日本で完成した文化の象徴であり、それが精神的なものであることに敬意を払う天心が、同じものが同じように西洋において受容されていることに着目している。

東西両大陸が互いに警句を投げあうのをやめ、両方に得るところがあれば、そのことによってたとえ賢くならなくとも、もっと悲しみの心をもとうではないか。西洋と東洋は異なった方向に発展してきたが、互いに長短補って悪い理由はない。[42]

以上によって考えられる『茶の本』の主旨は、西洋と東洋の差異を認めた上での平和的な相互理解と考えられる。内村や新渡戸にこの感覚はなかったように思われる。どちらかの一方的な受容ではなく、相互に理解し尊敬の念を持つという考えである。互いに理解しあえる可能性は、幼いころから西洋文化に馴染んでいた天心にしか見出すことの出来ない感覚であったのかもしれない。そしてまた、相互理解による精神的なものを尊ぶ平和が念頭にあったことだろう。自然を愛し何気ないものにも心を配り芸術を崇拝することこそが、人の為すべき行いだとする、美しい理想を天心は求めていたのではないだろうか。

春の曙のふるえる薄明に、鳥たちが樹の間を、不思議な抑揚でささやきかわしているとき、彼らが仲間同士で花のことを語り合っているのだと感じたことはないだろうか。きっと人類は、花をめでるようになったのと時を同じくして、愛の詩を歌うようになったにちがいない。無意識なるがゆえに美しく、もの言わぬゆえに芳しい花を措いて、どこに魂の処女性の花ひらく姿を想像することができようか。原始時代の男は恋人にはじめて花輪を捧げることによって、獣性を脱した。かれは、こうして、生まれながらの粗野な本能を超越して、人間となった。無用の微妙な用を認識したとき、芸術の領域に入った。[43]

Ⅵ　これからの時代における天心の思想の意義

天心の英文著作の最も中心的な意味としては、西洋に飲み込まれそうな日本そして東洋を擁護するための、西欧に対する啓蒙だったと考えるのが妥当だろう。天心の全ての著作において西洋に対する批判が見られ、特に『東洋の覚醒』『日本の覚醒』では、東洋は西洋に屈しないという意思が雄弁に語られている。

しかしながら、天心の理想が、西洋と東洋の相互理解にあったことも疑いない。それは、物質主義に頭を垂れ尻尾を振ろうとする日本に対して、日本の動向への危惧や批判を含んでいた。強い力に追従し、精神性や長い歴史で培われたアイデンティティを捨て去ってまで、西欧に馴染もうとする日本に対する遠い異国の地からの警鐘だったと考えられるだろう。現代においては大量消費の傾向はますます強くなり、日本そして東京が、物質文明の象徴として取り扱われることも少なくない。天心の考えたアジアとかけはなれた現状である。

天心が書いたこれらの英文著作、そして『茶の本』には彼の精神的な理想が確かに込められている。しかし、『茶の本』において、わざわざ古い日本を持ち出したところが、天心の失意を言外に語っているように思える。天心が英文の著作集を通して描いた日本は、まるで外

国人が持つ理想の日本のように見える。天心の目には、精神性を強調することで不可思議で手に入らないものを追い求めるような視線があるように思う。

彼が伝統文化を保持しようとすることは、国粋主義者といわれることの一因であろう。しかし国粋主義者である天心はただの西洋批判主義者ではなかった。冷静に西洋というものを判断した上での判断であり、これらの英文著作において、天心は西洋を物質主義の塊として批判し、東洋の精神主義を誇った。

しかし、当時の日本が「西洋」化しようとしていることを、天心は知っていた。茶に於いても精神性は薄れ、天心が『茶の本』の中で述べる利休の侘茶は理想であって、実際の茶道は形式化が進んでいたことはもちろんわかっていただろう。

二〇代三〇代の折に、国家的な規模における日本美術の再生を目指して活動していた天心は、著作で述べている理想の精神を謳うばかりではなかった。小山正太郎との確執[44]は言うまでもなく、天心は理想に反する政治的な活動も、その理想のためになら厭わなかった。その活動の原動力には、九鬼隆一と濱尾新による強力な支持があったことは勿論であり、また、アーネスト・フェノロサという当時の天心にしてみれば西欧における美術の権威とも言える人物が、日本の美術に多大な関心を払い賛嘆する様子を傍らで見ていたことが、日本美術を再興させようとする自信になっていただろう。しかし、一方で日本の時流は、伝統文化を忘れようとする動きが蔓延し西洋化に傾いていた。その傾きを少なからず緩やかにするため天心は政治的な意図をもって日本美術院での活動を行なっていたようでもある。

天心は『茶の本』を書いたが、一生を通して特定の流派に入ることはなく個人的に楽しむだけだったようだ。天心は、利休が精神的な茶道を、自らの修行の内に作り出したことについて感銘を受けていた。自分の好み、考えを貫き通しながら道を切り開くその姿勢に感心していたように思える。

茨城県天心記念五浦美術館に展示してある茶道具などにも、天心の茶に対する姿勢が窺える。一般的な箱点前の場合は小ぶりなものを用意するのだが、天心のものは特別にあつらえたわけではないのだろう、大きな竹籠に大ぶりの茶碗や大きな塗りの平棗を構わず詰めていたようである。その時に手元にあったものを、箱手前用に間に合わせて利用したのではないだろうか。そこに、天心と茶との関係をうかがい知ることができるだろう。当時の時代状況を考慮すれば、茶の細かい儀礼や形式を天心は面倒に思っただろう。もしくは、利休が完成させた侘茶に反していく現代の茶道に対して、反骨精神を心に抱いていたかもしれない。形式的な茶会などではなく、野点の形を好むこともその一端だろう。

『茶の本』の第一章のタイトルはA Cup Of Humanity（人情の碗）である。一杯の茶を楽しむという人間性（Humanity）としての「茶」というものに、天心は心惹かれていた。流派に属する茶ではなく、それこそ緑色をした液体に、日本のあるべき姿という理想を見ていた。天心は、近代化が進むことによって、日本の美や精神性が失われつつあることを感じ取り、なにか懐かしいものを慈しむ慰めに「茶」を楽しんでいたのではないだろうかと思える。

最後に次の引用は『日本の覚醒』の最後の部分である。天心の時代

から、長い年月が過ぎ戦争から遠くなったはずの現代日本でも、天心が描いた理想の世界はまだ見えていない。

いつ戦争は終るであろうか？西欧では国際道徳が、個人道徳の到達したよりもはるかに低い水準にとどまっている。侵略国家にはなんら良心というものがなく、弱小民族を迫害するさいには騎士道のすべてが忘れさられる。自己防衛の勇気と強さのない者は奴隷となるほかない。われわれの真の友は依然として剣であることを思いみるのは、悲しいことである。ヨーロッパが誇示しているこれらの奇妙な組み合わせ――病院と水雷、キリスト教宣教師と帝国主義、膨大な軍備があるための平和の保証、等は何を意味しているのであろう？こうした矛盾は古代アジア文明には存在しなかった。こうしたことは日本の王政復古の理想ではなく、その改革の目的でもなかった。我らをそのひだに包んでいた東洋の夜明けは来たが、世界はなお人道の暗闇の中にあるのを見た。ヨーロッパは戦争を我らに教えた。それではいつ、彼らは平和の恵みを学ぶのだろうか。[45]

終わりに

天心の死後より百年が既に流れた。現在のわれわれは、天心が批判した精神性を忘れて物質社会への道をひたすら進んでいる。天心の描いた理想は失われたかと思われるほど遠い。そのような中で、天心の精神的なものに対する思索を探ることは、これからの日本の在り方を考える上でも重要な鍵になるのではないだろうか。

この論考において、彼がさまざまな著作で折々に語ろうとした理想を検討してきたが、もちろん実際の天心は理想家という面だけではない。天心は、しばしば矛盾の塊として評されることからもわかるように、理想とは逆の現実を直視する目も併せて持っていた。天心という複雑な人物は、近代の重要な思想家の一人として、もっと研究されるべきであろうし、それがこの先の日本の進むべき指標になりうるのではないだろうかと考える。

注

(1) 一九〇六年　ニューヨークでFox Duffield社が初版。日本語訳については現在に至るまで様々なものが出版されている。以下にその代表的なものをあげる。○大正十一年　福原麟太郎訳『天心先生欧文著書抄訳』○昭和四年　村岡博訳　○昭和十一年　渡辺正知訳　○昭和二六年　浅野晃訳　○昭和三三年　桜庭信之訳　○昭和四四年　ソーントン・F・直子訳　○昭和四五年　森才子訳　○昭和四六年　宮川寅雄訳　○昭和五八年　桶谷秀明訳　○昭和五八年　黛敏郎訳などがある。ここでは、桶谷秀明訳　講談社学術文庫一九九四年を使う。

(2) 原題　Bushido: The Soul Of Japan

(3) 原題　Representative Men of Japan　改題前はJapan and Japanese

(4) 大岡信『岡倉天心』朝日選書　一九八五　第一章　頁二一八

(5) 岡倉天心『岡倉天心全集　三』支那の美術　頁二〇八

(6) 西暦に直すと、誤差が出る。実際は一八六三年二月一四日生まれになる。

（7）一九〇四年にニューヨークの Century 社から出版された。執筆は一九〇三―一九〇四。

（8）覚右衛門、勘右衛門、金右衛門と呼ばれることがある。覚右衛門が本名に当たる。一家の長が継承する名前。勘右衛門は一般的に用いられた名前。金右衛門は横浜時代に使われたとある。（岡倉登志『世界史の中の日本　岡倉天心とその時代』による）

（9）天心の幼少期について書いたもので参考にしたものを以下に挙げる。岡倉古志郎『祖父岡倉天心』中央公論美術出版　一九九九、大岡信『岡倉天心』朝日選書　一九八五、清見陸郎『天心岡倉覚三』中央公論美術出版　一九八〇、中村愿『美の復権―岡倉覚三伝』邑心文庫　一九九九などがある。

（10）神奈川県長延寺には電話して確認。戦争時の空襲により当時の文献は残っていないとのこと。また、中村愿『美の復権―岡倉覚三伝』にも同様に書かれている。

（11）（一八三四―一八五九）越前福井藩士。医者の息子として生れるも、藩士に登用されて頭角を現す。開国を推し進める政策をとり大老井伊直弼と対立し、安政の大獄にて斬首。

（12）岡倉古志郎『祖父岡倉天心』第一部　祖父天心と『父天心』をめぐって　頁三〇―三一

（13）『岡倉天心全集一』日本の覚醒　頁二二四

（14）『啓発録』振気　頁二四―二五

（15）『啓発録』勉学　頁四〇

（16）『啓発録』村田氏壽宛書簡　頁五七―六〇

（17）『岡倉天心全集一』日本の覚醒　頁二〇一

（18）『岡倉天心全集一』日本の覚醒　頁二一四

（19）『岡倉天心全集一』日本の覚醒　頁二二〇

（20）一九〇三年 Fox Duffield 社から出版。

（21）一九〇一―一九〇二年の間のインド滞在中に書かれたものと考えられている。天心の生前には刊行されていない。

（22）この言葉は、後に天心の本来の意図からは曲解されて大東亜共栄圏を支えるスローガンとして使われた。

（23）『天心全集一』東洋の理想　頁一三

（24）『岡倉天心全集一』東洋の覚醒　頁一四二

（25）『岡倉天心全集一』日本の覚醒　頁二二五

（26）天心の造語。「黄色い禍」と蔑視される表現に対して「白い災」との表現を返している。

（27）（一八五〇―一九三一）男爵。国粋主義であった彼は、天心の出資者となり天心の活動を支えた。しかし、後年その妻初子との問題によって決別することとなる。

（28）（一八四九―一九二五）天心の上司として天心の活動を助ける。東京美術学校創立時校長を拝命。後、東京帝国大学総長も就任。

（29）『岡倉天心全集一』東洋の覚醒　頁一四八

（30）『代表的日本人』はじめに　頁十一

（31）『日本の名著三八　内村鑑三』小編　頁四八九

（32）『岡倉天心全集一』日本の覚醒　頁二五三―二五四

（33）『岡倉天心全集一』日本の覚醒　頁二五四

（34）大岡も著書『岡倉天心』において内村が書いた『地人論』に着目し、『地人論』において世界を一大詩篇としてみようとする内村の世

界観について述べている。

(35)『日本の名著　内村鑑三』地人論　頁四〇七

(36)『自警録』真の愛国心　頁二六四

(37)『武士道』第六章　頁六一―六二

(38)『茶の本』第一章　頁一三―一四

(39)『茶の本』第一章　頁一五

(40)『茶の本』第一章　頁一六

(41)『茶の本』第一章　頁一九―二〇

(42)『茶の本』第一章　頁一九

(43)『茶の本』第六章　頁七七

(44)西洋画移入派の小山正太郎と、日本画の復興を目指していた天心は対立をしていた。小山正太郎が伝統的日本美術擁護派を攻撃した「書ハ美術ナラス」に対して天心は〈嗚呼西洋開化ハ利慾ノ開花ナリ。利慾ノ開花ハ道徳ノ心ヲ損シ、風雅ノ情ヲ破り人身ヲシテ唯タ一箇ノ射利器械タラシム〉と痛烈な一撃を返した。

(45)『岡倉天心全集一』日本の覚醒　頁二五六―二五七

参照文献一覧

天心の著作及び書簡

岡倉天心『岡倉天心全集』全八巻・別巻一巻　平凡社　一九八〇

一巻　東洋の理想・茶の本・東洋の覚醒・日本の覚醒他

二巻　評論・講演・逸話・意見書

三巻　評論・講演・逸話・意見書

四巻　美術史

五巻　日記・旅行日記

六巻　書簡

七巻　書簡・漢詩文

八巻　ノート・翻訳

別巻　天心宛書簡・年譜

Kakuzo, Okakura, *The Book of Tea*. New York: Dover Publications, 1964

岡倉天心『茶の本』（英文収録）桶谷秀明訳　講談社学術文庫　一九九四

岡倉覚三『茶の本』村岡博訳　岩波文庫　一九二九

岡倉天心『東洋の理想』講談社学術文庫　一九八六

研究文献

内村鑑三『代表的日本人』鈴木範久訳　岩波文庫　一九九五

内村鑑三『内村鑑三　信仰著作全集四』教文館　一九六三

内村鑑三『日本の名著三八　内村鑑三』松沢弘陽編　中央公論社　一九八四

岡倉古志郎『祖父岡倉天心』中央公論美術出版　一九九九

岡倉登志『世界史の中の日本　岡倉天心とその時代』明石書店　二〇〇六

大岡信『岡倉天心』朝日選書　一九八五

清見陸郎『天心岡倉覚三』中央公論美術出版　一九八〇

中村愿『美の復権―岡倉覚三伝』邑心文庫　一九九九

新渡戸稲造『武士道』矢内原忠雄訳　岩波文庫　一九三八

新渡戸稲造『自警録――心の持ち方――』講談社学術文庫　一九八二
新渡戸稲造『西洋の事情と思想』講談社　一九八四
Inazo, Nitobe. *Busido Samurai Ethics and the Soul of Japan*. NewYork: DoverPublications 2004
橋本左内『啓発録―付　書簡・意見書・漢詩―』伴　五十嗣郎全訳注　講談社学術文庫　一九八二
橋本左内『橋本景岳全集』全三巻　東京大学出版会　一九三九（一九七七復刻）
第一巻　啓発録・少年時代
第二巻　国事奔走時代
第三巻　幽閉時代

〔しばた　かおり／日本大学卒〕